

〈出原至道ゼミ活動報告〉 日仏学生共同プロジェクト “Project Abyss”

経営情報学部 出原ゼミ4年 大塚 隆広

出原ゼミを中心とする学生のチーム「Project Abyss」が、フランス Laval で開催された国際会議・展示会 Laval Virtual の出展審査を通過し、4月9日から13日まで体験型バーチャルリアリティ作品の展示を行ってきました。

Laval Virtual は、今年で16回目を迎えるヨーロッパ最大級のバーチャルリアリティの大会で、出原ゼミでは2004年に初めて参加して以来、今回で10回目の参加です。今年の展示の「Project Abyss」は、乗り込み型のシステムになっており、ユーザは潜水艦を操縦して海中を探検します。装置の中では、仮想的な加速感を体験することができます。この企画は、2013年に別の大会で審査落ちした後、およそ1年間、休暇期間中もずっとシステムの開発と改良を継続し、今回の審査通過につながりました。

今年の展示の大きな特徴は、ゼミの枠にとどまらないさまざまな「協働」です。書類応募時には、3Dモデリングで中川健さん（彩藤ゼミ3年）にお世話になりました。また、チーフデザイナーとして、チームメンバーに井上路華さん（豊田ゼミ2年）を迎えることで、作品のクオリティが格段に向上しました。

さらに、これまでの11年間の参加の歴史の中で初めて、この展示はフランス現地の提携校 ESIEA との共同プロジェクトとなりました。日本での制作と並行して、François LEBÉE さん（ESIEA 1年）を代表とするフランス学生チームに、同じ動作をする装置を製作してもらいました。展示5日前に現地に到着したあと、土曜・日曜も一緒に作業して、別々に作成してきたシステムを統合し展示にこぎつけました。

フランスチームについては、メンバーの真剣かつ意欲的な取り組みがとても心強く、一緒にプロジェクトを遂行してものを作るという楽しさを感じました。人と人が協力して作品を作り上げるという体験が、心に残りました。言語の壁はありましたが、フランス語と英語が拙くても、同じ目標を持っている人との意思疎通は難しいことはありませんでした。

井上さんは、応募時にはまだ1年生でしたが、デザイン能力が高く、大変信頼できるチームメンバーです。今回の展示について「体験してみることの大切さを学びました。海外と聞くだけで、言葉が話せない、習慣が違うなどと、かなりのプレッシャーを感じていたのですが、現地でも過ごすうちに、自分が抱いていた海

外への印象が変わりました。ESIEA の仲間はフレンドリーだったし、先生や現地の方にも大変気遣っていただきました。人にはそれぞれ得意なことと苦手なことがあり、チームだからこそそういった部分を補い合うことができると思います」という感想を持っています。

5日間の展示では、日仏の学生が協力して来場者に対応しました。800枚用意した体験者カードが品切れになり、追加印刷をお願いするほどの人気となりました。展示期間中、システム停止時間がなかったことが、出原ゼミの伝統であり誇りです。ほとんど休憩できない状態で5日間の展示を成しとげたときの達成感と一体感は今でも忘れられません。

ESIEA の Franck CRISON 教授は、今回の取組みについて「学生たちのモチベーションが驚くほど上がりました。この展示装置は記念作品として大切に保管します。このあとも、両校で学生を育てるために共同プロジェクトを継続していきましょう」とおっしゃっています。多摩大学の出原至道教授は「共通の目的を実現するチームとして、それぞれの才能を持ち寄って一緒に作業することが国際理解には極めて有効です。その過程で、多様性とその底で共有される人間性の価値に気づいて欲しい。次に続く学生が出ることを期待します」と話しています。



展示ブース



小さな艦長さん

最優秀地域貢献賞受賞 — ぼんぼこ UT 広報隊 - ありがたいの返事はありがたいと -

経営情報学部4年 鰐川 良

平成26年3月10日、私たち多摩大学学生団体「ぼんぼこ多摩の社 & ユニバーサル広報隊」は平成25年度学生による地域貢献活動団体助成金報告会に参加させていただきました。

私たちぼんぼこユニバーサルタクシー（UT）広報隊は（福祉法人による自立支援活動の協力）、そして（ユニバーサルタクシーの広報活動）と大きく分けて二つの活動を行っています。

福祉法人による自立支援活動の協力について。障がいを持った方々が仕事を得たり、社会の中で自立していく手助けを多摩地域で熱心に行う、グリーンピース工房という福祉団体があり、そちらが運営する「多摩うどんぼんぼこ」といううどん屋さんが多摩大学の近くにいます。私たちは、このぼんぼこのポスターやタペストリーを製作し、もっとたくさんのお客さんが来てくれるように店頭やイベントなどで展示し、働いている方々の自立を支援しています。「単にモノやお金を支援する」のではなく、お客様を呼び込み自立の手助けをしようと考え活動をしています。

そして2つ目のユニバーサルタクシー広報活動。ユニバーサルタクシーは外出困難の高齢者の方や、体が不自由な方のために考えられたタクシーで、そういった方々にとっては極めて重要な交通手段です。利用を促進することで、利用者の地域コミュニティへの参加を促し、地域社会の活性化にも繋がります。しかしユニバーサルタクシーはあまり浸透していない……というのが現状です。そのために、私たちは【ラジオCM】を自分たちで作って流すことで、そもそもユニバーサルタクシーってなんなのか、どうなのかということや、利用する事への潜在的な不安を解消し、利用を促進しようという活動を行っています。ユニバーサルタクシーのラジオCMは、外出が困難な方たちがどんな時に利用したら便利かを一つ一つのセリフで表現し、いろいろな立場にいる人からの目線で語り、さらに参加メンバーひとりひとりが声優を務め、自分達で録音・収録を行いました。このラジオCMは実際に平成24年12月29日にコミュニティラジオ局、FM西東京に放送もさせていただきました。

これらの活動を東京市町村の自治調査会の方々や色々なボランティアサークル、イベント等19団体が集まり行われた助成金報告会にて登壇させていただきましたところ、みなさんの投票により【最優秀地域貢献賞】を受賞させていただきました。

福祉や児童・観光・イベント・広報など、各団体によるそれぞれの色を持って

行われているボランティア活動の報告を聞いたり、色々な学生の方々と楽しく、でも真剣に交流ができ、多くの刺激をいただけた助成金報告会では、（ボランティアの意義）というものや、（地域への貢献）という意味を再確認させていただけた貴重な会でありました。

ボランティア活動を行っている中で、ありがとうございましたと声をかけてもらうことができました。

ありがたいはどういたしまして…それが当たり前のお返事もありませんが、そのとき私はこちらこそありがとうございましたと答えていました。ボランティアをさせていただいている私たちは活動を通じて多くのことを学ばせていただいています。私はボランティアとは、してあげるものではなくさせていただくもの、ありがたいという言葉にはこちらこそありがたいと答えるべきなのだと思えるようになりました。さらに、私たち目線であれば、ボランティア活動を通じた様々な活動の（社会実践の場）を実際に体験することができ、大学の外で活躍している多くの社会人や学生の方々とふれあいの場を持つことができ、大きな点です。（ボランティア活動）・（社会実践の場）・（社会人や学生の方々と交流）を通じ、今回の活動に参加した団体間のネットワークを作り、FacebookやSNSなどによる情報発信や交流イベントの開催をし、効果的かつ魅力的な情報発信の手段と方法を追及していったらという新たな課題も見つかりました。

多くの方々と交流し、学んだことや多くの気づきをこれからの活動に生かし、助成金報告会を期に新たな出発に向け頑張ってきたかと思っ



ぼんぼこ多摩の社 & ユニバーサル広報隊、地域貢献活動団体助成金報告の様子

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

企画、企画、企画、ああ企画、それが問題だ！

経営情報学部 2年 私市 洋人

「企画なき者は去れ！」と教室のスライドに映し出されている。「と言っても本当に去ってはダメ。あきらめて逃げてはいけない・・・」と笑いながら話す木村先生。今年度は、大学がある多摩地域に根差した企画を掘り起こすという設定だ。

「メディア実践論」は、映像制作をはじめとするメディア表現を、それに関する知識を学びながら、学生自らの手で実践して形にすることが目標だ。下調べ、企画立案、企画書作成、取材、これら全てを学生自らの手で行い一つの作品を完成させなければならない。資料を調べインターネットで情報を集めたり、カメラを持って取材に行ったりすることも大変だが、「企画立案」は最も骨が折れる作業だ。

私が取り組んでいる「ドキュメンタリー」という手法を用いたメディア表現は、いまそこにある「事実」をカメラに収め、編集して、公に発信するものだ。映像によって、制作者が切実に世間に訴えたい「真実」を描く営みだ。だから企画が「命」だ。

私は一年生の秋学期からこのゼミを履修した。右も左も分からないまま、何か一つ、企画を考えてみなさい」という先生の指示で、苦し紛れに出したのが「昨今の若者と車」という企画だった。若者の車離れが言われるが、それでも一部には車を趣味としている若者もいる。そうした若者を通して「現代の若者と車の付き合い方は、昔と比べてどう変化しているのかを見る」というものだった。しかしこの企画は取材に入る前に頓挫した。原因は「自分が何を伝えたいのか」をはっきりさせないまま動きはじめたことにあった。ドキュメンタリーは「疑問に始まり、信念に終わる」と言われるが、今になって思えば、自分には「なぜ」という問題意識が明確ではなかった。

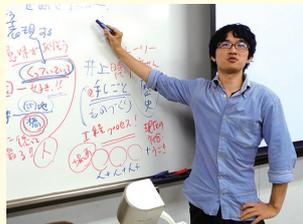
「発想は分かるが、結局君は何を伝えたいの？」という指摘を先生から受けた。私はその指摘について考えるよりも先に「まずは取材をしよう！」と意気込んでいた。しかし、取材相手に想定していた車好きの先輩と話し合った際、要領を得ない質問ばかりをして、結局企画のコンセプトも伝えられず、制作を進める手掛かりを見失ってしまった。その時は、若者の車離れが自動車産業や社会に与える影響という問題意識や、では若者は今後どのような車を求めていくのかというマーケティングの分野の意識もあまりなかったように思う。

こうした失敗を経験して、私は企画の難しさを学んだ。

「自分が何を伝えたいのか」「何をしたいのか」。これらを疎かにしたまま進むと、後々とんでもないしっぺ返しを受けることになるという、貴重な教訓となった。これは映像制作の現場だけではなく、すべてに当てはまることではないだろうか。

私は、これからも、様々な企画を提出するだろう。そしてその度に「それで、君は何が伝えたいの？」と問われるのだと思う。その時に胸を張って語ることでできる「答え」を持って制作に挑んでいきたい。

企画、企画、企画・・・。いま懸命に企画を考える毎日だ。



企画を練る！ここがスタート



今年度の「メディア実践論」十人衆

「撮りたいものを撮る」とは ～信頼という厚い壁に立ち向かう～

経営情報学部 3年 吉野 翔

「撮りたいものを撮れ」と言われたら、あなたなら何を撮るだろうか。私が選んだのは「特別支援学級」だ。

特別支援学級とは、学校生活を送る中で「特別な支援」が必要な子供が通う学級である。一般的には「障がい」がある児童、生徒が集まっていると思われているが、実際には様々な子供がいる。繊細で人見知りや激しい子や学校の勉強に興味を持てなくなった子、なにかしらの理由で不登校になった児童、生徒もいる。これらの子どもたちは通常の学級で学んでいても不思議ではないのだ。

私が通っていた多摩中学校にも特別支援学級がある。私自身も特別支援学級の卒業生だ。何事もなく生活していれば目にすることのない、学校教育の中で「見えないもの」とされてきた世界を見てきた。いまも友人との会話で、その事実を話すことは少なく、できることなら話さないですむようにもしている。特別支援学級という過去で受け入れてもらえないかもしれないという恐怖心からの行動だろうと思う。

私は多摩中学校で特別支援学級をテーマに映像を撮りたいと考えた。

これを「撮りたい」というのは、安直に教育や社会を批判しようというのではない。ただ、通っている子供たちが今後の人生で負目を感じることを少なくできるのではないかと、少しでも「特別」を特別でなくすることができればと思うのだ。

だが、その過程で大きな壁に突き当たった。それは「信頼関係」だ。

特別支援学級の児童、生徒の親に撮らせてほしいと頼み、すぐに良い返事をもらうことは、まずないだろう。映像を撮られること、それは大きなリスクを負うことになる。その映像によって自分の子供が偏見の対象になるかもしれない。子供が特別支援学級に通っていることで、私たちに想像できない苦しみを親たちは味わっていることもある。どんなに私が撮りたいと思って、撮る対象が「No」といえば取材できない。

ここであきらめるという選択もある。しかし、反対に、「信頼関係」を築くことも選択肢の一つだ。ひたすら学校に通って顔と名前を覚えてもらうこともできる。自分の過去の体験、現在の状況を話すこともできる。私の選択で制作を続行するかが決まる。私が行動できるかできないかで未来が変わる。だからこそ、映像制作は面白い。だからこそ、映像制作は難しい。

「撮りたいものを撮れ」という一言。簡単そうで一番難しい。「撮りたいもの」から、その人の生き方が見えてくる。

現在、「メディア実践論」では、多摩をキーワードに、「撮りたいもの」は何かを懸命に考えている。自分の人生や社会と向き合い、そこにある問題や課題、魅力を伝えるために映像作品を創ることに取り組んでいる。

長い時間がかかるかもしれないが、私は、これからも「特別支援学級」を追い続けていく。私の、この選択が、支援学級で学ぶ生徒たちのため、親のため、社会のために少しでも役立つことを、そして、私自身にとっても意味のあるものになることを信じて、私の葛藤と格闘が続く。



撮影プラン、構成を練る



多摩中学校特別支援学級にて

SGS での自己の成長と挑戦

グローバルスタディーズ学部 4年 渡邊 美憂

中学・高校時代、英語が好きで SGS に入学したが TOEIC を受けると、200 点代であり危機感を感じたことを今でも覚えている。もちろん、1 年次の英語集中プログラムのクラスは 1 番下のレベルであり、卒業資格の 450 点に届く気さえもしなかった。

そんな私をサポートしてくれたのは、学習支援室である。なんとか点数を上げたかったため、1 年次の頃は頻繁に通った。そこで英語を基礎から学び直し地道に努力した。私にとって支援室はとてもアットホームで、居心地が良い場所であった。熱心に教えていただけるので、毎回吸収することが多かった。そして 1 年次が終わるときには卒業資格の点数に近づくことができ、少しずつ自信がついた。

入学時から海外には興味があったので、学内で開かれた留学説明会に参加した。SGS にはいくつかのプログラムがあり、中でも海外に長期滞在し、提携校で単位がとれる交換留学制度に魅力を感じていた。しかし点数が低く基準の半分も満たしていなかったため、縁のないことだと思い 1 年次の春休みにバンクーバーへ 1 か月ホームステイをした。異国の地を初めて訪れ異文化を体験した。語学学校へ通い、放課後や休日は街を散策したり、ホストファミリーのもとで生活したりと全てのことが新鮮に感じた。より一層海外への関心が深まり帰国後は長期滞在できる交換留学に向け、地道に TOEIC の点数を上げる努力を重ねた。その甲斐あり、入学時の倍に点数が上がり、3 年次の秋学期に以前から憧れていた交換留学を実現する事が出来た。行き先はシンガポール、多民族国家の中で 5 か月間生活をして学んだことがある。

それは物事をイメージで判断しないことだ。留学を機会に初めて東南アジアを訪れた。新興国が多く、旅行でもあまり足を運ぶ

気にならなかったのが本音である。治安が悪く、衛生面が整っていないという印象があった。そんな中、興味本位で近隣のマレーシア、インドネシア、タイを訪れた。実際に足を踏み入れてみると、個々の国の独特な魅力を発見する事が出来た。またシンガポールでは留学生を始めとした様々な国の友人ができ、交流を通し更に物事を考える視野が広がったと思う。

以前はカナダに行き欧米の文化に憧れ、東南アジアには偏見があった。しかしこの機会にそれぞれの国のそれぞれの良さを感じたと同時に改めて日本の良さも認識した。新学期が始まり現在は国際ビジネスの授業を履修している。シンガポールに行き感じたことと重なる部分がいくつかあり、日々変化する国際情勢について学ぶことの面白さを感じるようになった。

私はこの SGS に入り留学を経験して自分なりに成長したと感じている。入学時から比べると英語力が上がったこと、そして留学したことによって何事にも挑戦することの大切さを学んだ。このことから東南アジアに目を向けるようになり、将来は海外で活躍したいという目標もできた。これからも、様々な経験をして自己の可能性を広げていきたい。



マレーシアのマラッカにて ナンヤンポリテクニクのインターナショナルフェア

インターンシップから得た気付き

グローバルスタディーズ学部 4年 大津 美波

大学生の時間の使い方は無限に存在すると考える。そして多くの学生が長期休暇中アルバイトに勤しみ、また短期留学や海外旅行を満喫する中、私は 3 年生の夏 2 度目のインターンシップに参加することを選択した。4 年間のうちのたった 1 ヶ月と 2 週間の経験が私の大学生活の大きな基盤となり様々な価値観を身に付けることが出来た。

元をたどれば 2 年次に大学のカリキュラムを利用しインターンシップに参加したのがきっかけであった。この時インターンシップを終えて働くことに対する消極的な気持ちは消し去られ、卒業後の社会での活動が楽しみになった。反対に大きな反省が残った。それは自分の強みである準備の準備まで行うことを活かしただけの活動であったことである。3 年生になりこの経験を振り返ったとき、もう一度自分自身と向き合いたい、それは自分には何の強みがあって何が苦手なのかを知ることであり、また大学生活では気付くことのないものを得ることができれば更なる成長につながると考えインターンシップに参加することを決意した。参加先に選んだのはスクワイヤ・サンダース・三木・吉田外国法共同事業法律特許事務所という世界 19 カ国にオフィスを構える外資系法律事務所にて 1 ヶ月間に渡るものであった。普段アルバイトでは接客業をし、過去のインターンシップでも営業の仕事を経験した私には何の接点も無い事務職、ましてや法律に携わるものであった。普段からどんなことに対しても準備を怠らざる

ように心がけているが、今回ばかりはそこに行っても何が出来のりかも想像がつかないまま、インターンシップ初日を迎えた。インターンシップでは法律事務所で働く秘書の事務作業を手伝った。実際の作業というと、excel 入力や実際の弁護記録を整理しファイリングや弁護士の出張タイムテーブルを作成したりと様々であった。作業は簡単な単純作業から、手順を考えながら取り組まなくてはならない複雑なものまでであった。

私はそれらの作業や法律事務所で働く人、弁護士の人たちと接し日々考えさせられ、感じ成長することが出来たと考えている。第一に時間を意識して仕事をする。与えられた仕事に対して事細かなことまでは指示は無く、自分で効率の良い方法を考え行動した。1 日の仕事をきちんとこなすことの大切さや、だからとするのではなく時間を考え自分がどう行動していくか考えることを学んだ。そして仕事に対する正確さである。いくら早くても間違いがあってももともとこうも無い。最低限のミスには自分で気付き訂正できることが大切である。最後に 1 つのことでいいから深く知識を持つこと。調べた経験やその知識は将来の自分自身の糧になるのだと強く感じた。

私はインターンシップの経験によって社会で働く楽しさや、責任感そしてたくさんの大切なことに気付き、得ることが出来た。この経験を残りの学生生活や今後の社会活動に役立てたいと強く願う。

2014年度 経営情報学部学生会執行部役員紹介

部長 伊藤 公亮 (3年)	書記 福田 雅之 (2年)	TCU 会長 阿部 佑樹 (3年)
副部長 角野 匡子 (3年)	企画・広報課 木下 周 (4年)	学園祭実行委員長 並木 望 (3年)
副部長 石川 一駿 (2年)	企画・広報課 石川 凌 (3年)	体育会 杉山 央明 (4年)
会計 島津 陽行 (3年)	企画・広報課 植山 聡 (2年)	
会計 宮川 直也 (2年)	企画・広報課 柴崎 実佑 (1年)	



今年度は、このメンバーで経営情報学部学生会を執行して参ります。
皆様のご支援賜りますようお願い申し上げます。

経営情報学部学生会執行部一同

学生会執行部主催 新入生歓迎会

経営情報学部学生会執行部 企画・広報課 石川 凌

4月8日、9日両日に学内の食堂で開催した。昨年度より引き続き開催された新入生歓迎会ではたくさんの新入生がサークルに興味を持ち、上級生の方々も熱心にサークル勧誘を行っており有意義な時間をそれぞれ過ごしているように感じた。より多くの新入生に学生生活の中心となりうるサークルに興味を持ってもらえるような空間を作れるように試行錯誤を繰り返した歓迎会は100名近い新入生が訪れ各サークルの説明を熱心に聞いている生徒や上級生と和気藹々としている姿が数多く見られ、来てくれた新入生が帰る時に「楽しかった!」「サークル決めました!」などの報告を聞き、企画してきたことが成功したと思うことができた。またサークル間どうしの連携なども見え、サークル分け隔てなく助け合い勧誘している姿が微笑ましく見えた。共に裏方として新入生歓迎会運営に貢献した学生会の皆の表情は、とても生き生きとしており、こういう小さなことが少しずつ、少しずつ多摩大の活性化に繋がっていく予感がすると、私は活動を終えて感じた。



2014年4月8日、9日新入生歓迎会の様子

KTC (Keep Tama Clean) について

経営情報学部学生会執行部 部長 伊藤 公亮

かねてより学内に実施されてきたKTC活動は、昨年度より、TCU (Tama university Circle Union) からその活動を委託され、学生会の下で運営を行っていくこととなった。昨年度は、毎週木曜日休みに(休日を除く)、サークルに所属する学生の手によって学内清掃を主とした活動が行われ、その実績として教室にゴミを置いて帰るなどといった行為が改善され、実際に清掃に携わった学生の意識が改善されたことが成果として示された。また、同年12月には、日頃の美化活動の延長として、「KTC大作戦」と称し学内年末大掃除を実施した。イベント立案時期が遅く、開催が差し迫った状態でイベントの準備を行わなければならない、準備不足が示唆されながら開催に至ったが、当イベントにおける学生参加総数は100名を超え、参加された学生からは真剣な表情も見てとれ、一人ひとりがそれぞれ、多摩大学への1年間の感謝気持ちを込め、より多くの学生の手によって2013年の多摩大学を「煤払い」することができた。そもそもKTC活動とは、多摩大学学内及び多摩地域における美化を成し遂げ、また、多摩大生の教育環境の向上することを目的としており、今年度も、5月よりKTC活動の実施にあたり、学生の美化意識を高め、更なる学内環境向上に繋がるよう努めていきたい。

今年度 KTC 活動実施目標

経営情報学部学生会執行部 企画・広報課 柴崎 実佑

今年度は、前年度に引き続き学内の清掃と、新たに地域貢献のため多摩川河川敷周辺を清掃していきたいと考えています。前年度より多くの学生が集まるように企画を早くから立案し、自分たちで多摩大学を綺麗にしていければもっと良いKTC活動ができると思うので、しっかりやっていきたいです。他にも毎週木曜日の清掃を、多摩大学を綺麗にするために、花などを植え多摩大学に緑を多くしようという考えや、近隣の清掃などを考えています。今年度は前年度よりも活動を増やし多摩をさらに綺麗にしていきたいです。最終到達地点はゴミをなくすことだと思うのですが、簡単のようで難しいのでこの活動を学内に定着させていけるようにしたいです。



2013年12月26日KTCイベントの様子